

## 「私がアメリカで学びたいもの」

函館中部高校 普通科 二年 久保田 彩音

私がアメリカで学びたいものは、エシカルファッションだ。エシカルファッションとは、「人と地球に優しいファッション」のことだ。そう思うようになったのは私の幼い頃の出来事が根底にある。

私は幼稚園の頃からファッションが好きで、デザイナーになりたいという夢があった。その思いを更に強くしたのは私が小学生の時に参加した北海道国際交流センターのイベントだ。このイベントでは会場に集まった沢山の人が各々の祖国の民族衣装を身に纏っていて、私はそれらを実際に目にし、生地に触れる事ができた。中でも惹かれたのはモロッコの民族衣装、ジュラバで、色鮮やかな色彩がとても美しかったのを今でもはっきりと覚えている。その時私は国を超えても祖国の文化が伝わる「服」というものは素晴らしいものだと思った。

それからはデザイナーになりたいとひたむきに思い続けてきた。しかし、高校生になり、その夢が少し変わった。きっかけは起業体験のワークショップに参加したことだ。このワークショップのためにインターホン販売の事業プランを作成していったのだが、インターホンを作成するための技術や知識がなかった。どうすればよいか分からず途方に暮れていた時に、ある起業家の方からアドバイスを頂いた。それは「知識が無いのなら、エンジニアを雇えばいい。」というものだった。それを聞いたとき、私ははっとした。今まで服を創り、販売するためには、自分がデザイナーであることが絶対だと思い込んでいたが、そうではないと感じた。私がか会社を作り、経営者になって、デザイナーを雇うことでもそれを実現することができるのだと気づいた。そして私はデザイナーではなく経営者になるほうが、服を通じて日本の魅力を知ってほしいという自分の思いをより広められると思った。また、このワークショップ内で事業プランを発表した際に、「本当に自分の商品を広めたいなら、市場を把握することが必要。」という意見も頂いて、経営をするための具体的な知識をつけたいと思い、大学では経済・経営を学ぶことを決めた。

それからすぐに学校の探究授業が始まった。私はちょうど近年若年層を中心としてファストファッションが大流行しているなか、ファッション業界の過酷な労働条件や大量廃棄が問題になっているというニュースを目にしたので、ファッションとSDGsとの関わりについて調べた。調べていくうちにわかったことだが、服の生産の過程で生じる廃水は、世界の廃水

のおよそ20%を占めるなど、服の生産による環境汚染は自分が想像していたよりも酷かった。また、アパレル企業のSDGsランキングで上位を占めているのは欧米圏の企業であることがわかり、日本の企業は、日本の企業の環境保護のための取り組みは世界と比べるとまだまだ十分ではなく、そういった取り組みを推進することが必要だと強く感じた。私は、服が好きだという思いだけが先走り、その背景を知ろうとしていなかった自分を恥じるとともに環境に対してなにか働きかけたいと思った。

そして、SDGsの取り組みが進んでいる欧米圏でエシカルファッションについて学ぶ体験がしたいという結論にたどり着いた。そのような体験ができるプログラムを探していくうちに、このプログラムを見つけた。このプログラムのホームステイ先はロサンゼルスで、ロサンゼルスには前述のSDGsランキングで第三位であったリーバイ・ストラウスの本社兼博物館があることを知っていたので自分にぴったりだと感じた。

また詳しく調べていくと、ロサンゼルスにはReformationという女性向けファッションブランドがあることを知った。私はこの企業が環境負荷量を計算し毎年報告していたり、タグには「ファッションは世界で三番目の汚染産業である」と記載し警鐘を鳴らしていることにも驚いた。そして、そのような情報を自ら発信していることに強く感心した。その他にもこの企業は、消費者がオンラインショップを通じて購入した商品の合計がどれだけ環境汚染を防いだかを確認できる仕組みを取り入れたり、カーボンニュートラルを実現しているなど、とてもSDGsに対して意欲的な素晴らしい企業だと思った。そしてこれは私が目指したいアパレル企業の姿だと感じた。

私は将来、自社の取り組みがSDGsランキングに載るようなアパレル企業を起業したい。そして、日本の文化を生かしたデザインで環境に優しい服を北海道から世界に届け、消費者の環境に対する意識を変えていきたい。しかしながら、私の知識はまだまだ乏しい。

だからこそ、私はアメリカでこのようなファッション産業での環境保護を推進する企業を見学し、SDGsに対する進んだ取り組みや考えを学ぶことでエシカルファッションについての知識を得たい。